コロンバンと共に—8—

門倉くら

〝加藤清正さん〟

〝加藤清正さんはいませんか？　清正さん!!

此処は上野の大学病院、眼科外来の待合室。朝の五時頃から受け付けた人々を、いよいよ診察室に順番に呼ぶ時の声だ。今から五十五年位前で、私が七才位の時の事だった。目をわづらった幼い私が、殊に片目を失うか否かの瀬目で、父親の背に負われ乍ら、三年の間通い続けた大学病院。

最高の峯と云われた、こうもと博士の診察を受けに来ている患者達の中には、遠くは鹿児島から上京し、旅館泊りをして迄の病院通いする人もいる位の盛況だった。

係りの小使さんは、踏み台の様な台の上に立ち、肩を聳やかして病人を睥睨し乍ら、患者の名を呼び上げる。朝早くから来ている患者や、付き添いの人々は退屈し切って、壁に寄りかかって時間を持て余し、椅子に坐ってる人達は、折角占めた椅子を離すものかとばかりに、便所へ行くのも我慢し乍ら己が名を呼ばれるのを待っている。此の小使さんは悪気はないのだろうが、特殊な名前にぶつかると一段と高く声張り上げて、その名を呼ぶ。『加藤清正』の声に、退屈し切った人々の其処、此処から、クスクスと笑い声が起った。毅然たる顔をして、〝お静かに〟

〝お次は、吉富秀吉さん。秀吉さんですか？　秀吉さんですか？　早く返事して下さい〟。

又々、廻りからクスクスの声が捲き起る。二人の男は片目を押え乍ら、コソコソと番号札を貰って診察室に入っていった。清正と秀吉が——

そして、それから二十三年後の或る日。

良人と一緒にフランスへ行った東洋軒の大平さんの奥さんと私の二人は、果物籠を手に持って昔懐しい子供の頃を思い出し乍ら大学病院を訪れた。

真鍋物療科の特別病棟に、良人達の恩人であり御主人の伊藤さんが入院されていた。病棟といっても真鍋物療科は其の頃特殊の研究場所の様に覚えている。室は余り広くはないが、玄関の様な上り口があり、病室に次の間迄ついている。此の前、妙子を連れて御見舞に上った時、丁度、付添人の方もお家の方も居なかったので、御主人自ら、次の間へ立って桐箱に入ったカステラを切って、妙子と私に出して下さった。

〝門倉君から便りが有りますか？〟

〝ハイ。良くまめに寄越して呉れます。

何時も御主人の事を有難がっています〟

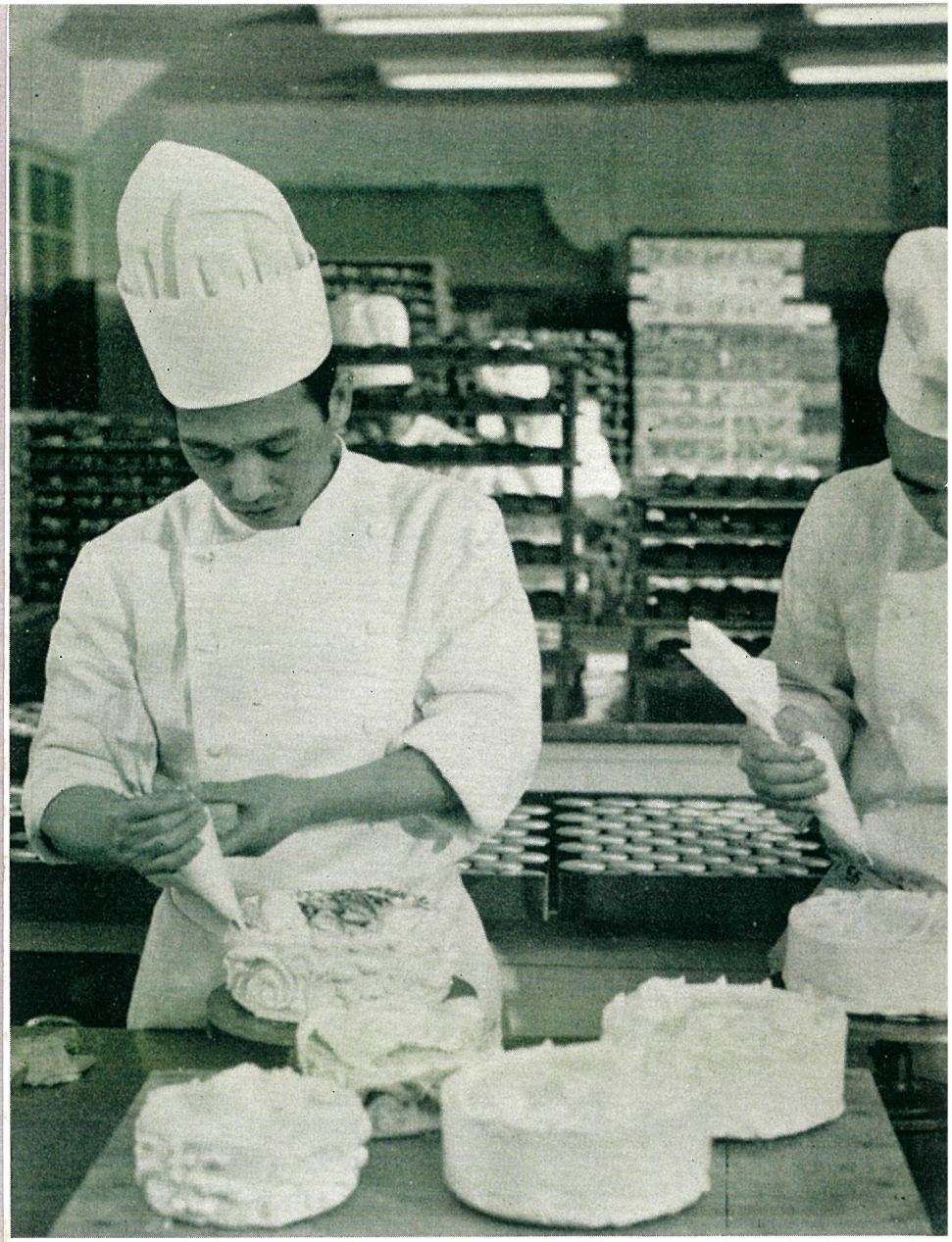
〝何か面白い話でも書いてありますか？　会社に寄越すのは仕事の報告ばかりで〟

〝ハイ。此の間来たのに、北白河宮殿下御夫妻が、ガールドノールで御出発の際、石井大使や、マキ前田（前田侯爵）御夫妻やら大勢のお見送りで、汽車が発車する間際に『殿下、御気嫌よく』と、申上げてしまったのだそうです。殿下も無意識に手を出されて強く握手をなされたとか。

そんな事を云って来ました〟

〝やり兼ねないよ〟

と、笑っておっしゃる。今の時代と違い当時の御皇室と云えば『不敬罪』なる法律が厳然と控え、日本の内地だっ



コロンバン渋谷工場

たら恐らく大勢の官憲がいかめしく並び、勿論近寄る事などは及びもつかない。舞台がガールドノールであろうが、東京駅だろうがそのお見送りは金屏風式で、いくらフランスに於いても純日本風の厳かなものであったらしい。

在仏者として幾らか日本より気安く御見送りは出来たものの、人間対人間の一般的感情の親しさを瞬間的に感じた良人が、突然、窓にすすみ出た気持が率直に感じられはしたものの、古い日本の我々の常識では考えもつかない事だった。

二度目の今日は、先輩の奥様を先導にして、静かにつつがなく、小さい乍らも公式の御見舞を終えてほっとした。

〝門倉さん。少し休んで参りません〟

〝ええ〟

御主人の御見舞ともなれば、些か気も張って終ると一緒に疲れが出た所、心よくさそいに応じる。ベンチにお互いにハンケチを敷いて腰かける。当時の私は煙草も飲まず、と云うより、飲まされなかったもので、ただ、坐っておしゃべりに時を過した。私が二十七で、大平さんは多分十五位上の様だった。

〝まあフランスで一体何をしてるのでしょうね。大平は東洋軒に入る時、洋行させる御約束があったのですけど、私共じゃ、別にやって頂かなくとも良いと思ってましたのに〟

〝何うして？　そんな勿体ない〟

私は、突然の事ゆえ断片的に言葉が飛び出した。

〝ほんとですよ。貴方はお若いからお判りにならないのですよ。大平の先輩の上野さんと云う方が、外国から帰られて間もなく亡くなったんですの。今度も大平がフランスへ行く事が定まりましたら上野さんのお母さんが、フランスへおやりになるのはお止しなさいと、随分とめて下さいましたのよ。

私だって今迄、お蔭様で幸福に暮らしているので、無理しない方が良いと思いますの〟

〝何故ですか？〟

大平さんの奥様は、非常に普段から御主人思いの方で、其の頃流行のウヴラを飼っては茶や黒の斑点のある可愛い卵を沢山産ませ、御主人にも飲ませる許りでなく御進物にもなさり私も分けて頂いた事が度々あった。中年の家庭の主婦としての落ちついた生活振りに、好意を抱いていた私は、〝何故ですか？〟と聞かなくとも判る様な気がするが、何故か理由を聞き度く思った。

〝土地も言葉も慣れませんのに、短い月日でも責任は有りますしね。疲れて帰った方の中には、結核になった方もあるし、それに、悪い病気も持って帰ったりし様ものなら二、三年位で死んだりするらしいですよ〟

〝そんな馬鹿な事が!!〟

私はあまりにも洋行熱に浮かされて、それが叶えられた事に満足し切っていた。しかし、研究と余暇の楽しみ多い日々、そして瞬間も休みなく動いている華の都パリ、私は日本の空から見通す様に空をみつめた。

〝洋行なさった人の中でも、殊に悪いのは梅毒で、それも大概脳梅毒になるのですって〟

梅毒という言葉は、電柱に貼ってある事から世間一般の人は誰でも知っているが、それよりもっと恐い脳梅毒とは？

〝脳梅毒になったらそれは大変。えらい力が出て体中が燃

える様になってね、寒中でも戸外へ裸で飛び出しちやうのですって〟

〝マア!!　それじゃ気狂いですね〟

夢にも思わぬ話に、私はすっかりおびえてしまったが、そんな心配のかげりを私の胸に入れてよいか、何うか判らなくなった。

私には信じられない。

あのまだ見ぬ美しいパリに、そんな汚ればなしになるものがあるなんて。歴史深い芸術、文化も最高な、世界的なものの中に、如何に突然として汚れたものが生じたって、それを消す術もあるだろうに——

旅行者だけが受難者で身を亡ぼすなんてわけはない。ましてや、私は良人を信じ、良人は留守の妻を信じて己が天職を伸ばすチャンスを身を持って体験している、誇りある身が何んで亡ぼす事があるだろうか。そんな事、絶対に有り得る筈がないと。

今日のお見舞に於ける大平さんの奥様と、御主人伊藤さんとの会話を思い返して見る。

〝二人共、とても多忙らしいし、遊びもあるだろうが、仕事こそ第一なのだから丈夫に過す様、手紙を出す時私が云っていたと伝えて下さい〟

私はただ有難く聞いた言葉だったが、その言葉の片鱗に奥様がこれ程迄に真剣に心配せねばならぬ、女の身の何かを感じられたのだろうか。

〝奥様。良人からの手紙にも、先づ第一に女房と子供に金のなくならない内に、お土産を買ったって、その時大平さんも御一緒だったと云ってますよ。

手の届かない事ですもの、取り越し苦労は捨てましょうよ。御主人がお帰りになっていろいろとお話を聞かれたら、今度は奥様も行き度くなられますよ。

私だって何時かは行き度いっていう夢は捨てませんわ〟

段々と下うつむかれた奥様と、何となく興奮してしゃべる私。奥様の静かな声が、

〝貴方はお若いからね〟

確かに大平夫人と私とは時代のづれはあった。しかし、良人と常に共に居るという事が一番幸せで、そして、一番安心である気持には変りはない。夫人の、初老の良人に対する愛情の充満を感じて胸が痛んだが、若さは私に心強かった。

東京の空も私から見た時、少しは、たいせいの色を探し当てる時もあるかも知れない。その時、奥様の良人いっぱいの目で眺められる時、あの一寸出た薄雲も雨に思えるのではないかしら。

御主人の伊藤さんが此の前笑い乍ら、

〝門倉がハイカラになって帰って来るから、他処の人と間違えて握手なぞしてはいけませんよ〟

と、おっしゃった言葉を思い出し、其の日の一日も早く訪れる様、そして再び会い見る波止場の出あいの早かれと心の中で祈った。

若さの持つ張り合いと幸せを身に泌みて感じていた私が突然として我が子、長女の妙子を失った。しかも良人の留守中に——

白百合から帰って来ても、なお、幼稚園の先生の様に我が子二人から離れず暮らしていたのに——

そして其の時始めて私の胸に実感をもって大平さんの奥様に云われた言葉が響き渡った。〝貴方はお若い〟と。